

# *Emma*: エルトン氏とフランク・チャーチルの役割

## *Emma*: The Roles of Mr. Elton and Frank Churchill

内藤 歆修

Kanshu NAITO

### 要 旨

*Emma* は Jane Austen 最大の傑作と言われている。いま一つの傑作 *Pride and Prejudice* と並んで Austen 作品の双璧をなすことは間違いないであろう。

両作品も結婚に到る過程における、女主人公の精神的成長を追っている。このようなオースティン共通の主題を内包しているが、両作品の、共に魅力的な主人公は生活環境、思考形態、行動様式に大きな相違がある。作者は Elizabeth と似て非なる Emma を創造したのである。

本作品 *Emma* の主人公 Emma は物語の題名になるほど、周囲の者達より全ての面で卓越し、思い通りに行動出来る環境にいる。この優位な生活が彼女の全人格に影響を与え、色々な思い違いや失敗を起こさせる。地域の女王様の存在の彼女を思うがままにからかい、翻弄し、彼女の思い上がった考え違いを大きくしていく存在が、Frank Churchill であった。彼は快活な態度で周囲の者達に波乱を起こし、影響を与えていく。彼の登場の前に、牧師 Mr. Elton は Emma の浅慮な行動を読者に示す媒体の役目をしている。この下地があつてこそ、Frank の行動が際立つのである。

愚鈍な牧師 Mr. Elton と機知に優れた賢そうな Frank の Emma に与えた影響を考察した。

ジェイン・オースティンは *Pride and Prejudice* (1813) が出版された翌日の手紙<sup>(1)</sup> で、‘I must confess that I think *her* as delightful a creature as ever appeared in print, and how I shall be able to tolerate those who do not like her at least I do not know.’ と主人公 Elizabeth Bennet に対する思い入れと自信のほどを述べているが、1 週間後の手紙<sup>(2)</sup> では ‘The work is rather too light, and bright, and sparkling; it wants shade.’ と早くも自作に冷静な厳しい目を向けている。

これを念頭に置いてか、翌年本作品 *Emma* を書き始めたころ、主人公について ‘a heroine whom no one but myself will much like’<sup>(3)</sup> を書くつもりですと、元気活発できらきら輝く程魅力的な Elizabeth と正反対のヒロインを書く決意を語っている。その「誰からも好かれなような主人公」Emma は

小説の冒頭で次のように紹介される。

Emma Woodhouse, handsome, clever, and rich, with a comfortable home and happy disposition, seemed to unite some of the best blessings of existence; and had lived nearly twenty-one years in the world with very little to distress or vex her. (I, i)<sup>(4)</sup>

彼女は若さ、美貌、才気、財産、地位などのすべてを与えられ、何ひとつ不自由のない生活をしている。誰からも好かれなところか、誰からも羨まれそうなお嬢様である。だが、オースティンの円熟した筆は、最初から、主人公 Emma に対する皮肉をこっそり忍ばせている。「もうすぐ 21 歳になるが、人生の悲しみも苦しみも殆ど知らずに生きてきた」ということは、人生の実相を知らない未熟な存在、即ち、何の苦勞もなく、精神的成長を余りせず身体だけそのまま成人してしまったということでもある。

恵まれ過ぎた環境に育った者に見られがちな欠点を、Emma も多分に持っていることが指摘されている。

The real evils indeed of Emma's situation were the power of having rather too much her own way, and a disposition to think a little too well of herself. (ibid.)

この the real evils が複数形であるのは、1 つには自分の知識を過信するあまり自分の判断に誤りがないと思ひ、思いのままに行動することであり、もう 1 つは過大な自己愛による自尊心である。*Pride and Prejudice* の Elizabeth Bennet には、偏屈な父と問題行動を起こせばかりいる母ではあっても、曲がりなりにも両親が揃っていて、5 人姉妹を擁する大家族である。殊に姉とは気が合い日常の事柄を忌憚なく話し、相談しているし、妹たちの面倒もよく見ている。父は変人に近い人だが、彼女には適確な忠告をしてくれる。Elizabeth には十分な社会性を備え、自己を客観視出来る環境が整っている。外部社会に直結した家庭内で社会的訓練がされているのである。

一方 Emma は幼少の頃に母が他界し、姉は早く結婚したので、若い頃から 1 人立ちし、一家の主婦代わりを務めていた。父は晩婚で、父娘の年齢差は非常に離れていたため共通の知的な話題を持つことは難しく、また病弱を楽しんでいるような消極的な人なので娘の相談役になるには不適當であった。自分の居心地の良さが保証される限り、Emma の言動を誉め、溺愛した。彼女の自己愛は父の後ろ盾によって確固たるものになっていた。変化を大層嫌う父との生活は閉鎖的にならざるを得ず、外界との接触が少なくなり、彼女を世間知らずにし、裸の王様のような存在に追い詰めつつあった。村一番の名門の地主の家に生まれ、誰からも崇められ、甘やかされて育ってきたとなると、自分のすることは全て正しいと思う、その自惚れと思ひ上がりのほどは容易に想像出来よう。しかも、才気煥

発で、有能であるという自覚が、彼女の自信ある言動の裏付けとなっている。

更に、負の面として読書をしないことが指摘されている。勤勉と忍耐を必要とする読書をせず、自由気ままに空想にふけるのが好きと記されているように、現実をしっかりと見たり、聞いたり、記憶したりすることが苦手である。現実認識が不足し、ものごとを客観的に把握し、人の立場に立って深く理解しようという努力をしないで、上辺の様子を観察しただけで、持ち前の空想力を駆使し、極めて主観的な判断してしまう傾向がある。独断に陥り、しばしば判断を誤ってしまう。周囲の甘やかしによる思い上がり、特権意識と階級意識が加わり、自分を特別視し、他人の心を思うがままに操ることが出来ると思ってしまう。彼女の欠点は自らの美貌や才能に対する自惚れではない。小さな社会における優越的な地位を拠り所とした過剰な自負とも言えよう。

そんな順風満帆とも言える Emma の生活に思わぬ問題が降りかかる。その発端は、家庭教師としてというより、友人や姉のような存在として長い間一緒に暮らしてきた Miss Taylor が結婚して Mrs. Weston になったことである。Emma にとって Mrs. Weston の結婚は 2 つの意味があった。1 つはこの結婚によって彼女が Woodhouse 家からいなくなった生活の変化である。これは表面上些細な変化ではあるが、それが持つ意味は Emma にとって重大であった。Mrs. Weston を失ったことで唯一の “a friend and companion”(ibid.)を失い、“intellectual solitude”(ibid.)に悩む危険にさらされることになるのである。「友でもあり、コンパニオンでもある人」とは同等の知性や共通の感情を分かち合える生活上の欠くことの出来ない大切な相手であって、対等な精神的、感情的交流が求められる存在である。

Emma が住んでいるハイベリーの村は小さな社会で、彼女と対等に話せる若い男女は殆ど見当たらない。この交際範囲の限られた狭い環境でこれから先「知的な孤独」に耐えることは、大いに不安であった。精神的危機に瀕した Emma は内面的不安を解消し、克服しようとして新しい人間関係を求めていく。外見的には何不足なく見える Emma だが、「知的、精神的孤独」の危機に直面して、新しい人間関係を構築すべく行動を起こさざるを得ない。

Emma 開巻第 1 章は、家族が 2 人だけになってしまい、意気消沈している Woodhouse 家に、タイミング良く Emma の義兄に当たる農園主 Mr. George Knightley が入って来て、2 人の気持を引き立ててくれるところから、物語が始まる。Emma は式に出席しなかった Mr. Knightley に結婚式の様子などを話し、この結婚は自分がまとめたのだと自慢気に語る。しかし、Mr. Knightley は、ただ予想だけではあなたの手柄とは言えない、と Emma のこの言葉に異議をはさむ。Emma も負けてはいない。予想を当てるにも才能が必要だと、当意即妙にすぐにやり返す。Mr. Knightley は 37、8 歳で、Emma とは年齢が 15 歳以上も違うが、2 人は何事も遠慮なく話し合える間柄である。彼は Emma を絶対的に守る立場を崩すことはないが、常に冷静で適切な助言を、時には苦言を交えながらも、与えている。彼女にとって非常に重要で有益な人であるが、実際の所、不愉快であったり、利害が対立することがある存在でもある。

ある朝、Emmaは寄宿学校の校長Mrs. Goddardに生徒のHarriet Smithを紹介された。身元不詳の私生児(a natural child)ではあるが、従順な性格とEmma好みの美貌の持ち主である。Emmaは彼女を一人前の貴婦人に仕立てあげて紳士と結婚させようとする。何の根拠もなしに、Harrietは立派な身分の紳士の娘なのだが事情があつてGoddard塾に預けられている身なのだとロマンスめいた想像をする。それ故、結婚の相手も紳士階級に属しては釣り合わないと思ひ込む。結婚する気が毛頭ない自分の身代わりとして、恋愛から結婚へと体験させる操り人形として選んだのである。その相手としてEmmaが選んだのが、村の牧師、Rev. Philip Eltonであつた。彼は近隣で評判の美青年だが、出自は大変良いという程ではなく、Emmaは“elegance of feature”(I, iv)が欠けていると見ていて、個人的には余り評価していない。だが、Harrietにとっては結婚するのに不足のない相手だと考えている。

当のHarrietは既にRobert Martinに好意を持っているが、身分と家柄と教養を重んずるEmmaにとってMartinなど全然問題にならない。身分は紳士階級とはほど遠い自営農に過ぎない男である。Mr. EltonならHarrietの頭からあの農夫を追い払うのに最適であると思ひ、Emmaは様々な機会を作ってMr. EltonとHarrietを近付けることに努力をする。その手段の1つとして、Mr. Elton立ち合いの上で、Harrietの肖像を描き始める。彼はHarrietとEmmaを等しく誉め、その出来上がった絵を絶賛する。そして、それを額縁に入れてもらうためにロンドンへ行くという役を喜んで買つて出る。Emmaの励ましによって、Harrietの心が大きくMr. Eltonに傾きかけていたとき、Martinから彼女宛の結婚申し込みの手紙が来る。Harrietは今やEmmaに万事依存し切つているので、手紙をEmmaに見せて進退を決めてもらおうとする。その手紙は予期していたよりも立派であつたが、Emmaは一向にMartinの価値を認めず、彼女に断りの手紙を書かせてしまう。

その翌日、Mr. KnightleyがEmmaの家に来て、Robert MartinがHarrietに求婚することになつたと告げる。だが、Harrietが既に断わりの返事を出したとEmmaから聞かされた彼の驚きと憤慨は並大抵のものではなかつた。彼から見れば、Harrietは私生児で、生活は安定しておらず、女子塾の特別寄宿生以外の何者でもない。きれいで気立てはいいにしても、知能は弱い小娘に過ぎない。そのようなHarrietがMartinのような財産もあり、慎重で誠実な青年の申し出を断るとは考えられない。彼はMartinを賞めるが、Mr. Eltonについては“the value of a good income”を充分心得ているので、“an imprudent match”(I, viii)をすることはなかろうと言つて、愛想の良い彼の本性を見抜いている。自分の判断を過信しているEmmaは自分の認識と異なる見解を一笑に付してしまう。

このように、自分の思い通りにHarrietを従わせているのを見ると、Emmaの愛情は相手への思いやりではなく、相手に自分の好意を押しつけ、支配することに結び付く性質のものであると思われる。Harrietの上に君臨する形になるこの関係は彼女の支配欲を益々助長し、屈服することを知らない傲慢で偏頗な人柄を作り上げることになりかねない。Mr. Knightleyはこの2人の交際は双方にとって望ましいものではないと憂慮している。

しかし Harriet の肖像画を媒介に Mr. Elton と彼女を接近させることに成功したかと思えたとき、彼は肖像に描かれた女性ではなく、描いた女性に熱烈に求婚したのであった。彼女の期待と自信は一挙に覆され、不快な結果となってしまう。読者は遡って、事ここに到るまで、一片の疑惑も差しはさむことなく、Emma の判断や行動の一部始終を眺めていたわけではない。Mr. Knightley の判断と忠告が既に示されている。彼は早々と Mr. Elton の性格を見抜き、Emma の余計なお節介を止めさせようとしていた。今度の事実によっても、Mr. Knightley の判断力の正確さは立証された。ここに示されるのは彼の判断的確さと Emma の未熟な判断力や軽卒な振舞いである。

Emma の計画の失敗は突然明らかになった。Weston 家のクリスマスのディナーが終わり、偶然 Emma と Mr. Elton は帰りの馬車の中で 2 人だけになった。上等なワインの酔いに促されて Mr. Elton はこの絶好の機会を捉えて、熱烈な求愛を Emma にしたのであった。彼女にとっては晴天の霹靂であったが、読者には十分に思い当たる所がある。ディナーが始まる前に、Mr. Elton は Harriet が風邪のために寝込んでいることを Emma に知らされ、暗にディナーなど参加せず Harriet の見舞いに行った方がいいと仄めかされた。彼は何と答えていいかわからないという表情を浮かべたが、出席を取り止めるつもりはなかった。しかし、

Emma, too eager and busy in her own previous conceptions and views to hear him impartially, or see him with clever vision,.... (I, xiii)

と作者が示しているように、Emma は彼の真意を見抜くことは出来なかった。この場面の直後、Emma は余り社交的でない義兄 Mr. John Knightley にも Mr. Elton は彼女に好意を持っているようだと言われている。即座にそんなことはないと言否定するが、Mr. Elton の態度はこれ以後、ディナー中も不可解な点が多く、彼を恋人となど考えられない Emma は不思議に思い、時には当惑させられる場面が幾度か描かれる。読者は既に作者の事前の仄めかしによって、Emma との間に一定の間隔をおき、一段高い位置から彼女を俯瞰し、その愚かな判断や振舞いを笑いつつ眺めている。Mr. Elton の告白という事態に到って初めて、Emma は「自分の認識していたエルトン氏」が「真実のエルトン氏」ではなく、「自分にとって都合のエルトン氏」であったことを思い知る。思い違いをしたり、曇った目で眺めたりしているのは Emma の方で読者ではないということがはっきりする。

Emma はこの失敗に深い自己嫌悪の念にとらわれる。I, xvi の章での反省<sup>(5)</sup>は大変理性的である。事件の経過を最初から検討し、自分に忠告してくれた人びとの言葉の中に、自分の知識よりも、正しい知識が示されていたことをしっかり認識する。理性的な検討をし、潔く自分の誤りを認めている。Emma は Harriet や Mr. Elton に夢中になる際の動機は単純かつ軽薄であったが、失敗の後の自分に対しては誠実に、理性的であろうとしている。ここに Emma が自分の行動に責任を持つとうとする、精神的に自立した女性であることが示されていると言えよう。半面、深い自己反省をするが、一晚寝

て朝になると、気分が一新して楽になり、今後の方策を考えている。この前向き、いささか軽薄な、楽天的な姿勢も彼女の特徴である。

Frank Churchill の登場によって、Emma の物語は第 2 段階を迎える。Mr. Weston には前妻の実家に養子に行っている 1 人息子がいる。幼くして母を失った息子 Frank はヨークシャーのエンスコームの名家で母方の親戚 Churchill 家の養父母に育てられ、現在 23 歳になっている。彼は実父の Mr. Weston の再婚に対して、祝いの挨拶に来るのが大変に遅れている。Weston 家のクリスマスに集まった人々は、彼から Frank について繰り返し話を聞かされる。Emma は Frank に興味を抱く。結婚するつもりはないが、この魅力的な若者の名前を聞いたり、考えたりすると、我知らず興味を感じるのであった。Frank の父親が Miss Taylor と結婚してからは、しばしば自分が結婚するとすれば、年齢、性格、身分ともに、彼こそ自分に相応しい人だと思った。両家の深いつながりから言っても、彼は自分と結婚すべき男性だという気がしていた。初夏の頃、皆を長く待たして、やっと現れた Frank に会ってみると、非常に美青年で、容姿や対応の仕方など、すべてで非の打ちどころがなく、その顔つきには、父親ゆずりの活気があふれ、機敏で賢明そうに見えた。Emma は立ち所に彼を気に入った。

一方、Frank と同時期に、一時的に滞在している女性 Jane Fairfax も村人の注目の対象であった。ハイベリーの元牧師の孫娘、即ち Mrs. Bates の孫で Miss Bates の姪であった。Jane は “particularly graceful” (II, ii) で、美貌、知性、教養共に完璧な女性である。同様に優れた貴婦人である Emma は美点も欠点も明らかにされて喜劇的に描かれているのに対し、Jane は美德を全面に出した伝統的な薄幸のヒロインとして描かれている。彼女の薄幸性というのは経済的な問題に集約されている。経済的な裏付けのない彼女は家庭教師となって自力で生計を立てなくてはならない。彼女の自活の問題は当時の貧しい中産階級の女性と仕事との係わりをよく示している。彼女が家庭教師になることは作中の人物は殆ど悲しむべきことと受けとめている。この苦難から逃れるには結婚しか道はない。結婚は経済的な保障を与え、屈辱的な地位から救うことが出来る。彼女は孤児で、亡父の友人 Colonel Campbell の親切によって大佐の家に引き取られ、立派に学芸を修めていた。

Frank は最初の訪問の翌朝、再び Emma の家を訪ね、前日彼女の家からの帰途、Jane を訪ねた話をする。彼は以前から彼女と知り合いであったようである。それを Emma が話すと、言葉を濁して要領を得ない。彼女は少しじれて次のように言う。

“Upon my word! you answer as discreetly as she could do herself. But her account of every thing leaves so much to be guessed, she is so very reserved, so very unwilling to give the least information about any body, that I really think you may say what you like of your acquaintance with you.” (II, vi)

Frank は Emma のこの言葉に刺激されてか、ウェイマスで Jane と度々会ったことや Colonel

Campbell 夫妻の人柄について語る。Jane のピアノの演奏が見事だという話をし、この話題から更に、ある男性がある女性と婚約し結婚直前だったが、彼はこの女性の演奏よりもその友人である Jane の演奏を聞きたがったと語る。Emma はこの男性と女性を Miss Campbell とその婚約者 Mr. Dixon だと推察する。この様なとき、彼女の空想力は自在に力を発揮する。そして、Jane が控え目で慎重で自分の気持ちを全く見せないのは何か隠し事をしているのではないかと疑惑を彼に仄めかす。この言葉は Jane には何か秘密があるのだろうと読者の心に疑念を招く効果を持っている。Frank の言動はその意図が何処にあるのか分からない所がある。このピアノを巡るエピソードで無意識に Emma の疑惑を招くような話をしたり、またただ理髪だけのために、ロンドンまで 16 マイルの道のりを往復したりする。Emma は特別に悪いとは言わないが、馬鹿げたことと思う。Mrs. Weston や Mr. Knightley にもいい印象を与えないが、この理髪店行きは、実は他に大事な目的があったことが後になって分かる。いずれにしても、彼の人間性に疑惑を招く行動であったには違いない。

この後、ハイバリーの新興資産家 Mr. Cole の邸で開かれたパーティーで、夫人が Mrs. Bates の家に素晴らしいピアノが届けられた話をする。殆どのは Colonel Campbell から Jane への贈り物だろうと言うが、Jane 自身も贈り主について見当がつかないらしい。Emma と Frank はこのことについて推理する。Emma が想像する贈り主は最初に大方の見方と同様に Colonel Campbell、次には大佐の娘で Jane の親友の Mrs. Dixon、さもなくば、the Dixons の共同の贈り物だろう、そして遂には Mr. Dixon 単独の贈り物だろうとなっていく。Emma は、Mr. Dixon が、Miss Campbell に求婚した後で、Jane に恋をするようになったのか、Jane が彼を愛していることに気付いたのではないかというような邪推に近い憶測までする。一方、不思議なことに、伶俐で、常に抜け目なく振る舞い、自己主張が強い Frank は、Emma の奔放な想像に道化のように調子を合わせ、何の抵抗もなく賛成し、彼女の推測が広がるだけ広がるのを許している。常日頃と違って、Frank が自分の意見も何もなしに相手の言葉に盲従しているのはおかしいと考える読者は多いであろう。Cole 家のディナー・パーティーの翌日、偶然 Mrs. Weston、Frank、Harriet、Emma は Mrs. Bates の家を訪ね、着いたばかりのピアノを Jane が弾くのを聞くことになった。そこで、ピアノと共に多くの楽譜が届けられているのを見た Frank は次のように言う。

“Very thoughtful of Col. Campbell, was not it?—He knew Miss Fairfax could have no music here. I honour that part of the attention particularly; it shews it to have been so thoroughly from the heart. Nothing hastily done; nothing incomplete. True affection only could have prompted it.”  
(II, x)

この言葉を巡って 3 人の心象風景が描出されている。Frank はピアノを送った当事者であるから、Jane に対して表面上大佐のことを当てこすりながら、ピアノのみならず楽譜まで送ってくれるとは

本物の愛情がなければ出来ないことと余裕を以て自画自賛し、悦に入っている。自惚れや、小賢しい本性が垣間見える。彼の言葉は聞く人にとっては如何様にも解釈出来る。Jane は恐らく、言葉通り Col. Campbell がピアノを送ってくれたと推測して、Frank の言うことを理解したので微笑みを浮かべたのであろうし、Emma は自分が言った Mr. Dixon のことが頭にあるから Frank は言い過ぎ、その言葉は辛辣過ぎると、自分の言葉を恥じる気持になった。しかし、Jane の顔を尚も見ると、歓喜の微笑が浮かんでいる。愛らしい、このまじめな感じの Jane が道を外れた、不逞な感情をいだいているのだろうかと疑う。この時点では、Emma も読者も未だ Frank と Jane が秘密の婚約をしていることを知らない上に、読者は Emma の視点に立って事態を見ているので、Emma の考えに違和感を持たずにいる。だが、後にピアノの“the giver”は Frank だと明らかになったとき、Emma にはしたくない邪推を抱かせ、それに寄り添うようにして、更にその邪推を育てていった Frank の方が将に不逞な人物ではないかと考えざるを得ない。

Emma は読むのが難しい小説であると言われている。確かに、複雑な要素を内包している言葉が多い。再読を要求する作品とも言われる。最初に読んだときには何気なく読み進んで、特別重要な意味を持っているとは思われない箇所も、暫くすると、その個所が重要な意味を持つことが分かるということに幾度か遭遇する。初読では謎を解くように読み、Emma と共に考えを巡らせ、足下のおぼつかない歩みを進めなければならない。登場人物達が興じる謎解きや、シャレード、判じ物などの多出も読者の判断を迷わせる要素になっている。再読によって、または前の部分を読み直すことによって、裏に隠された意味や別の位相が現出する。謎の覆いが剥がされると、Emma は一段と喜劇性を増すのである。Frank の登場前は Emma をからかい、翻弄する人物は 1 人もいなかった。しかし、Frank は Emma を思う存分翻弄する。親戚ではあっても扱いにくい Mrs. Churchill に気に入られ、自分の思いを十分に叶えて来た Frank にとって、自意識の高い、お人好しで高慢なお嬢様である Emma を、Jane との婚約を秘密にしておく手段の 1 つとして扱うのは赤子の手をひねるより易いことであつたらう。Frank の陽動作戦に乗せられた Emma は愚者の楽園に遊ぶ、正しい判断が出来ない者として、その言動の滑稽さを対象化されるのである。からかわれているとも知らず、自己の判断に絶対的自信を抱く Emma は、Frank のそそのかしに乗って筋違いの想像を巡らし、得々と 1 人よがりの意見を述べる。初読のときには気付かなかった読者も、Frank と Jane の関係が分かった後、Emma の姿を見直すと、その喜劇的姿が際立って見えるのである。Frank の表と裏の 2 つの世界を股にかけ、自由自在に自らの両棲類的存在を楽しんでいる行為が、彼のまわりの者達の真の姿をあぶり出すことにもなっている。

Mr. Elton は Emma に求婚を断られた腹いせのように、電撃的に結婚し、意気揚々と戻って来た。落ち着いた歓楽地バースで知り合い、短期間に互いの利害だけで結婚のようである。当然想像されるように花嫁は上辺のみを飾る、厚かましく、自惚れが強い軽佻浮薄な Augusta Hawkins という女性であった。Mr. Elton はと言えば、妻に満足しているばかりでなく、誇りにさえ思っているようで



ある。彼の品性も妻と同等のものであったのだ。Mrs. Elton は、教養もあり、上品な Jane が経済的に恵まれていない事が分かり、自分が何とか救いの手を差し伸べなければいけないと思う。Jane はこのお節介に悩まされる。3 ヶ月滞在の予定でハイベリーに来ていたので、この厄災から逃れるためにも the Campbells のもとに帰ればいいのに、不思議なことに動きそうな気配はない。アイルランドに滞在している the Campbells や Mrs. Dixon から彼女にもそこに来ないかという誘いの手紙が来る。Emma にとって Jane が Mrs. Elton の恩着せがましい干渉にじっと我慢しているのは、全く謎であった。

ハイベリーの人々は競って新婚の the Eltons を晩餐会に招待する。Emma は品のない Mrs. Elton が嫌いであるが、体面上、仕方がなく夫妻のための晩餐会を開くことにした。その席上で、Jane が毎朝早く郵便局へ手紙を取りに行っているようだが、体の弱い彼女には良くないから止めるようにと Mrs. Elton が言う。しかし、Jane は健康のために散歩しているのだと言い、Mrs. Elton の申し出を固く断る。このやり取りを見聞きしていて、Emma は彼女が愛している人からの便りを期待しているのではないかと推測する。

食事後、客間で Jane を独り占めにしていた Mrs. Elton は、彼女に自分の知り合いの上流婦人の家庭に家庭教師の職を無理に世話しようとする。しかし、頑なに Jane は少しもその話に乗ろうとせず、固辞し続ける。その強い気持ちは次のように表れる。

“When I am quite determined as to the time, I am not at all afraid of being long unemployed. There are places in town, offices, where inquiry would soon produce something – Offices, for the sale – not quite of human flesh – but of human intellect.” (II, xvii)

当然、このような現実の生活の厳しさを直接的に生で見せるような言葉を聞けば、Mrs. Elton ならずとも、“Oh! my dear, human flesh! You quite shock me.”と叫ぶであろう。平素おとなしく、慎み深そうな Jane が言ったこの言葉は Emma 達が属する upper middle class から外れて working class に入っていかなければならない悲愴感を示していよう。教養や才芸などを生活を豊かにするものとして活用するのではなく、生きるための生活の糧を得るのに切り売りするしかない彼女の絶望的気分を、Mrs. Elton は単に自分の影響力を示したいだけで、無意識に増幅させている。今同居している Bates 家の 2 人は、将にこの厳しい現実の中に暮らしている。十分な収入もなく、人の情けにすがって辛うじて生きている。Jane は将来の自分の姿がここにあると思って生活しているのであろう。しかも、将来を誓った Frank は Emma とあたかも恋人の如く振る舞っている。健康を損なうのも尤もである。

暫く姿を見せなかった Frank は、Mrs. Churchill の療養の都合でリッチモンドへ移って来た。距離が近くなったので、頻繁に Weston 家を訪れるようになった。そこで、前の計画が復活し、5月にクラウン亭で舞踏会が行われることになった。独身の Emma は舞踏会のオープニングのダンスを

Mrs. Elton に譲らざるを得ない。それで、ここでの主役は自分だと思ひ込み、元来遠慮を知らない Mrs. Elton は我が物顔に振る舞っていた。Frank は当初 Mrs. Elton に初めて会えることを楽しみにしていたが、彼女の Jane に対する尊大な態度を見ていて不快に感じた。“Jane!” – repeated Frank Churchill, with a look of surprise and displeasure. – “That is easy....” (III, ii) 自分の恋人をなれなれしく呼び捨てにしているので腹を立てるが、無視することにした。

Mr. Elton は Harriet を徹底的に無視する。ダンスの相手がいなくてぼつねんと 1 人で座っている彼女の近くを、彼はわざわざ彼女を無視しながら、まわりの人に話し掛けて歩き回っていた。それを見ていた Mrs. Weston が Harriet と踊ったらどうかと誘うと、今まで踊っていたにもかかわらず、“My dancing days are over.”(ibid.)と言って相手にしない。Mrs. Weston がそれ以上何も言わずに、驚き、屈辱にまみれながら席に戻って行ったのが Emma にははっきり分かった。This is Mr. Elton! the amiable, obliging, gentle Mr. Elton. と今更のように彼の本性を理解した。彼はすぐ Mr. Knightley のところに行って話し始めたが、夫婦は互いににやにやしながら目配せをし合っていた。Emma の胸は怒りに燃え、顔までほてってきそうになった。だが、この事態を見逃す Mr. Knightley ではなかった。次の瞬間、彼は Harriet の手を取ってダンスの列に入って来た。彼はいつもはダンスをしなかったが、ここでは素晴らしいダンスを見せた。Harriet は喜び、感激し、Emma も安堵した。

Mr. Knightley は the Eltons の Harriet を傷付けた振る舞いを非難し、Emma の反省の言葉を引き出した。そこで、彼は Harriet が今までの自分の評価よりずっと素晴らしい女性であることが分かった、と言う。その後、心が通い合った Mr. Knightley と Emma は「兄と妹」としてでなく、男性と女性として気持ちよく踊ったのである。

Harriet がジブシーに襲われるという事件が起きた。その窮状を救ったのが、偶々そこを通り合わせた Frank であった。この知らせを受けたとき、Mr. Elton の件で苦い思いをしたにも関わらず、Emma はこの若い 2 人が結びついてくれれば楽しいことになるなどと夢想し始める。一方、Harriet は身分違いの男性を慕うようになったが、結婚など出来ないと思っていると Emma に告白する。地獄のような惨めさを、天国のような幸せに変えてくれた男性だと話すが、Emma は持ち前の空想癖でその男性をジブシーから救ってくれた Frank と思ひ込んでしまう。その時は、自分の想像に満足して、Harriet から詳しい説明を聞かなかった。彼女は依然として自分勝手な思ひ込みする習慣から抜け出せない。Harriet のこの気持は後になって、Emma に大きな決断を迫ることになるのを彼女は未だ分かっていない。

最初から Frank が嫌いであった Mr. Knightley は、彼を見ている内に気付いたことがあった。まわりの人々は、Frank と Emma が似合いの恋人同士と認めているが、Frank と Jane の間に暗黙の了解があるように思えた。ある夕方、Mr. Knightley、Emma、Harriet、the Westons、Frank、Jane、Miss Bates が散歩の帰りに Emma の家に寄ろうとしているとき、医師の Perry が馬で通りかかる。Frank は Mrs. Weston に、“what became of Mr. Perry’s plan of setting up his carriage?”(III, v)と

尋ねる。夫人は驚いた顔をしてそんな計画は聞いていないと答える。Frank は彼女の手紙に確かにそう書いてあったと言い、では、自分は夢に見たのだろうかと思議な様子をする。そこへ、Miss Bates が、その事は Mrs. Perry が私の母に話してくれたが、未だ秘密だから自分と Jane 以外には話してはいけないと言われたので、誰も知らないはずだと事情を説明した(ibid.)。この時、Frank の顔には動揺を隠すような、笑ってごまかすような表情が浮かび、Jane はせわしなくショールを羽織り直していたのを Mr. Knightley は気が付いた。

皆で Emma の家の広間に入ってから、アルファベットの 1 字ずつが記してある札を並べて「文字遊び」をする。Frank は Jane の前に blunder (大失敗) という文字を並べる。勿論、先程の馬車の一件への言及である。彼は次に Dixon という文字を Emma に示し、Jane に渡す。この 2 つの単語に Jane は顔を赤らめ、不快な反応を示した。それを見ていた Mr. Knightley は Frank と Jane は複雑な関係にあるのは間違いないと思ったが、この出来事の意味する所は正確には理解出来なかった。Frank は思いのままに、人々を翻弄している感じである。皆が帰った後、少しの間残った Mr. Knightley は、Emma に Frank と Jane は恋人同士と思ったことはないのかと訪ねると、彼女は即座にその想像は全く間違っていると自信満々に否定した。観察力に欠ける彼女は Mr. Knightley と同じ場面に立ち会っていても、2 人の裏に隠れた秘密など何も気が付いていない。

6 月の中旬のある日、ドンウェル・アビーでイチゴ狩りパーティーが行われた。晴天の暑い日であったが、ドンウェル・アビーは素晴らしい屋敷と庭園で、参加者は皆楽しく過ごしていた。しかし、Jane は Mrs. Elton に家庭教師の話で辟易させられて気分が悪くなったり、途中参加の Frank は暑さで不機嫌になったりして、Emma まで不愉快になってしまった。

翌日はボックス・ヒルへのピクニックが行われた。前日の暑さを引き継いだような日で、参加者 9 人全員が一体感がなく沈滞ムードとなっている。さすがの Mr. Weston も全体を纏めようと努力したが、無駄であった。Frank が Emma に恋の戯れのような仕種を始める。この場を盛り立てるために、Emma もそれに乗った。やがて、少しずつ寛ぎ、陽気な気分になっていった。2 人のやり取りは、外目には、“Mr. Frank Churchill and Miss Woodhouse flirted together excessively.” (III, vii) と見える程であった。しかし、Emma の気持は裏腹であった。

Not that Emma was gay and thoughtless from any real felicity; it was rather because she felt less happy than she had expected. She laughed because she was disappointed.... (ibid.)

Emma は Frank が優しい心遣いを示してくれるのは嬉しかったが、彼への恋心は甦ることはなく、今や彼は友人でしかなかった。そんな弾まない気持ちで、彼に昨日のことを持ち出し、“self-command” (ibid.) を欠いていたので、機嫌が悪かったのですねと言う。その直後、同じ言葉が Emma を直撃する。

Frank は皆の気を引き立てようとして、突然、銘々が何か話を披露することにしようと Emma が

提案していると大きい声で言った。それにすぐ反応して、いつも取りとめのない長広舌を振うので定評のある Miss Bates が

“...then I need not be uneasy. ‘Three things very dull indeed.’ That will just do for me, you know. I shall be sure to say three dull things as soon as ever I open my mouth, shan’t I?” (ibid.)

と、あたりを見まわしながら言った。これを聞いた Emma は

“Ah! ma’am, but there may be a difficulty. Pardon me – but you will be limited as to number – only three at once.” (ibid.)

と、まわりの沈滞した雰囲気苛立ち、今までの Miss Bates に対する軽視の念を抑えきれずに思わず言葉を挟んでしまった。社会的弱者に助けの手を差し伸べなければならない立場の者が言うてはいけない言葉を言ってしまった。不意を打たれて、Miss Bates は Emma の言う意味を悟るのにちょっと時間がかかったが、やがて、Emma の言葉に傷付き、顔を赤らめた。

“Yes, I see what she means, (turning to Mr. Knightley,) and I will try to hold my tongue. I must make myself very disagreeable, or she would not have said such a thing to an old friend.” (III, vii)

Emma の生涯でも痛恨の一言であろう。將に、“self-command”を持っていない人の言葉である。全ての人に辞を卑くして、最大限の気を遣い、人の情けにすぎりながら、やっと生活の体面を保っている者を、生活の苦勞も知らずに生きている Emma が、思いやりの一片もなく、一刀両断で裁いてしまった。人に愛想を言い、身の回りに人を引き付ける手段である、彼女の言葉を封じてしまうということは、彼女の全生活や全人格を否定することにも繋がりがねない重大な事であった

身勝手な行動を取っている the Eltons は、全体の雰囲気をもとめるよりも壊して、Frank を不愉快にさせる。Frank は、この2人が歓楽地の社交場で知り合い、落ち着いて互いを十分に理解する前に結婚したにも関わらず、両者の気持ちが寄り添っているのを見て、皮肉交じりに “Happy couple!” だと評する。と言うのは、普段の生活の姿を見ずには結婚相手の女性の人間性は理解出来ないのだからと言う。だから、

“How many a man has committed himself on a short acquaintance, and rued it all the rest of his life!” (ibid.)

と、結婚についての考えを語る。それを聞いて、普段は殆ど人前で意見を言わない Jane が口を開いて結婚観を述べる。

“... it can be only weak, irresolute characters, who will suffer an unfortunate acquaintance, to be an inconvenience, an oppression for ever.” (ibid.)

作者は何の説明も加えていないが、上の言葉を発したときの Jane は Frank と別れることを考えていたことに、読者は後に気が付く。また Frank も、Jane が、Emma を相手に結婚相手を探してくれなどと、気楽なことを言っている彼に恋をしたことを深く反省しているのに気付くべきであった。この III, vii の章は終了するのに、未だ重要な場面を残している。

Emma は帰りに馬車を待っている間に、傍に立っている Mr. Knightley に厳しく反省を迫られる。

“I cannot see you acting wrong, without a remonstrance. How could you be so unfeeling to Miss Bates? How could you be so insolent in your wit to a woman of her character, age, and situation? – Emma, I had not thought it possible.” (ibid.)

Emma はその場の気分で、半分腹いせのようにした行為が相手を深く傷付けたとは思っていないので、殆ど反省していない。酷い冗談でもなく、Miss Bates も気が付かなかったはずだ、と言い逃れをしている。だが、Mr. Knightley が厳しい態度で相手に接しているときは、作者オースティンの代弁をしていると理解してよい。今回は、Emma は少しくらいの反省では許されない。Mr. Knightley は、大変傷付いても Miss Bates が率直さと寛大さを以て Emma に高誼を感謝する気持を表していたことを説明する。Miss Bates が裕福だったら、彼女が罪のない醜態を演じても気にしないし、Emma が失礼なことを言っても非難しない、と Mr. Knightley は彼女の考えの足りなさを指摘した。

“This is not pleasant to you, Emma – and it is very far from pleasant to me; but I must, I will, – I will tell you truths while I can, satisfied with proving myself your friend by very faithful counsel, and trusting that you will some time or other do me greater justice than you can do now.” (ibid.)

Mr. Knightley の情理を尽くした説得の言葉に Emma は一言もない。彼女は未だかつてない心の動揺と痛みを感じ、帰りの馬車の中で家に帰り着くまでずっと、涙がほおを流れ続けるのに任せ、それを留めようとしなかった。この取り乱した態度は Mr. Elton と Harriet の結婚話の失敗とは比較にならない。心から、深い反省をしているようである。

Emma は義務感に押されて、ピクニックの翌朝、Mrs. Bates 家を訪ねる。Jane は元気がないらしい。

Miss Bates から、彼女が Mrs. Elton に勧められた家庭教師の口を引き受けたという話を聞かされる。Miss Bates はと言えば、Emma にとって幸いなことに、最初昨日のわだかまりがあるように感じられたが、次第にいつもの様子に戻って言葉多く、Jane について詳しく説明してくれた。Bates 家を辞し、帰宅すると Mr. Knightley が訪ねて来ていた。これからロンドンへ行くという。父が、Emma は Mrs. Bates 一家をいつも気に懸けていて、今訪ねて来たところだと言ったとき、彼女が Mr. Knightley を見ると、彼は誉めるような表情を浮かべた。彼の賞賛するような熱い眼差しに、Emma は胸が一杯になる。彼は更に、彼女の手を取り接吻しようとするが、唐突に手を引つめてしまった。Emma は Mr. Knightley が友情以上の親密さを示したことに大きな喜びを感じ、その手に接吻してくれればよかったと思ったが、心から満足した。それにしても、彼の突然のロンドン行きは彼女にとって謎であった。

Mr. Knightley がロンドンに発った翌日、Frank が最も気を遣っていた Mrs. Churchill が亡くなったという知らせが届いた。するとその10日程後、今度は Mrs. Weston から Frank と Jane は10月にウェイマスで秘密裡に婚約していたことを Emma は聞かされる。夫人の死が婚約公表を可能にしたことは明らかである。皆は大いに驚き、憤慨もする。ウェイマスで婚約をした後、2人でハイベリーへ来て、率直さと素朴さとを装い、だまし続けたという感じである。Mrs. Weston はこの婚約は Emma にとって大きな失望であると心配したが、Emma は Frank に全く恋心など抱いていないと請け合う。Mrs. Weston に Frank からの手紙を読ませてもらうと、その中で自分がピアノを Jane に贈った事情、Jane から来た婚約解消を告げる手紙に対し彼女を宥める返事を書いたのだが、送るのを忘れていたことなどと、彼の軽薄な人間性を垣間見せるような身勝手な自己弁護を繰り返していた。

読者はここまで読み進んで、本作品 *Emma* 中の、Frank と Jane に関する話の進行を章を追ってたどり振り返って見ると、今まで謎であった個所がはっきり意味を持って見えてくることに気が付くであろう。これら謎の部分は作品中に散在することで読者の注意を逸らし、物語に謎解きの要素を与え、物語の厚みと興味を増していることが分かる。この作業によって、作者が周到な計画をもって効果的な材料を適切に読者に提供していく手順が明瞭になると言えよう。

Jane と Frank とをめぐると謎は、Emma が介在することにより複雑になっている。Frank と Emma を結婚させることは、両家の関係等から見て当然のことと the Westons は考えているし、当初は Emma 自身も同様に認識していた。周囲もそれを期待していた。そのようにお膳立てが出来た舞台に Frank がハイベリーに現れ、当初から Emma に好意を示し、その後も事あるごとに彼女に近付いて行く。読者は2人の交際の進行を読み進み、所々で Jane と Frank との切れ切りの交渉を知らされることによって興味をそられる。2人の水面下の交際は大部分隠されているが、隠しきれない愛の葛藤が行動となって表面に部分的に姿を現す。これが疑惑や混乱を誘うのである。多くの読者は、Frank は Jane と婚約しているのに、何故にここまで Emma と親しくするのか疑問に思わざるを得ないであろう。Jane は婚約者が Emma に近づくのを見て、出来るだけ気持を抑えながらも不愉快そうな反応を隠せず、遂には思いつめて体調を壊し、婚約破局寸前にまで進む。Jane の悩みに無頓着な Frank の行動を見ている

と、彼は一体何を考えているのかと不思議に思わざるを得ない。単に *flirtation* を楽しんでいるのであろうか。Jane が苦しみ、思い悩むのを見て快感を感じる嗜虐的な趣味の持ち主なのだろうか。行動の動機が明確でないだけに読者は戸惑うこととなる。

同じ若い男性でも、Mr. Elton は Emma の心を勘違いして野心を抱き、性急に恋の告白をした。Emma は彼のことなど歯牙にも懸けていなかったため、結果的には彼は恋の独り相撲を取っているだけであった。彼が彼女に結婚の申し込みをしたなど、彼女のプライドを傷付け、不愉快な気持ちにただけであった。Mr. Elton は自発的に Emma をからかったり、翻弄したりすることはなかったし、する能力もなかった。彼女自身には影響を与えることは少なかった。しかし、彼との交際は Harriet の気持を傷付けるなど、彼女の行動を反省する機会になり、精神的成長には、多少寄与した面があった。

Frank は既に見たように Emma に、Mr. Elton とは比較にならない程、大きな影響を与えた。内面的な悩みはあるだろうが殆ど表に出さず、快活に、思うがままに自由に振る舞っている。態度は上品、丁寧、慇懃で人を陥れるような悪意は感じられないが、何を考えているのか掴み所がない。外見上の魅力を周りに振りまき、特段に Emma に下心があったようではなかったが、一時的にしても彼女に結婚を意識させたし、彼女を彼のペースに巻き込み、時には喜ばせ、戸惑わせ、笑い物にし、彼女の隠れた性格を露わにした。ハイベリーの女王であった Emma はかつてこのような扱いを受けた経験がないので、自分の別の面を知り、反省することも出来た。Mr. Knightley はと言えば、Frank が出現する前から彼に敵対意識を抱いていて、Emma が彼に心を寄せることに警戒心や嫉妬心を早くから持っていた。そして、ボックス・ヒルのピクニックでの 2 人の *flirtation* を見て、傷心の余りロンドンに心を癒すために行ってしまう。Frank を恋敵と見始めた頃から、Emma を結婚の相手の女性と強く意識するようになっていく。Miss Bates のことで Emma に厳しく注意したのも、将来の妻に対する忠告と受けとめることが出来よう。翌日、それを素直に受け容れた Emma を見て、思わず気持が溢れ出て、今までしたことなかった、彼女に接吻をしようという行為に及んだと思われる。Emma は人格的に立派な、紳士の見本のような Mr. Knightley を基準にして Frank を観察していたので、彼の軽佻浮薄な性格を見抜くことが出来、恋人としては彼から心が離れて行った。Emma は Mr. Knightley とは幼少の頃からの付き合いで、しかも義理の兄妹となっているので、2 人は男女という意識は殆どなかった。だが、Frank の介在によって、互いに異性として意識し始め、結婚相手として互いを見るようになって行った。このように、Frank の存在は Emma と Mr. Knightley に結果的には強い影響を与えている。

今まで、Emma は何度も、失敗、自己反省を繰り返しているが、彼女が経験するのは人間の理性でコントロールできる範囲のことであった。理性で抑制出来ない情熱的な恋、性衝動、大自然の力、運命などは入りこむことを許されていない。しかし、理性的な Emma は輝くばかりの健康美を備えていて、“the complete picture of grown-up health” (I, v) と、生のエネルギーに満ち溢れた人物として描かれている。知的で、理性的になれる人物であるが、本質的には、直観と感情の人である。彼女の判断はいつも直観に基づいており、好悪の差が激しい。それ故に失敗するが、理性的な反省をす

る。それには重大なショックの経験と、Mr. Knightley の公平な評価が必要であった。こうした Emma の本質が典型的に示されていると思われるのは Harriet の告白を聞いて、Emma が Mr. Knightley を男性としての実体を持った存在として初めて気付く有名な場面である。Frank の秘密の婚約が明らかになって、Emma が一番心配したのは、Harriet が再び失恋の衝撃を受けることであった。1度ならず、2度までも Emma は Harriet に身分違いの恋心を焚きつけて、失恋に追い込んでしまった。辛い気持を押して、Harriet に Frank の婚約を教えるが、その反応は驚くものであった。Emma は以前 Harriet に身分違いの恋をしていることを打ち明けられていたが全てを聞かず、その相手は Frank だと勝手に解釈していた。ところが、Harriet の恋愛の相手は Emma の意表を突く Mr. Knightley で、彼も Harriet の気持に応えているという。

Emma は悲劇の縁に立ち、一瞬、その深淵を覗いた。

A few minutes were sufficient for making her acquainted with her own heart. A mind like her's, once opening to suspicion, made rapid progress, She touched – she admitted – she acknowledged the whole truth. Why was it so much worse that Harriet should be in love with Mr. Knightley, than with Frank Churchill? Why was the evil so dreadfully increased by Harriet's having some hope of a return? It darted through her, with the speed of an arrow, that Mr. Knightley must marry no one but herself! (III, xi)

Mr. Knightley に対する気持ちを知覚した後、Emma は先ず自分の心を徹底的に理解することの重要性を痛感し、自己の検討、反省という理性的<sup>(6)</sup>な精神活動に入る。実際には自分の心も理解していないのに自惚れて、他人の気持を理解出来ると考え、他人の運命を左右しようとした。単眼的な狭い視野をもって思考し、限られた経験と気儘な感情に基づいて行動してきた結果が大きな失敗となったことを思い知った。過去の行動を検証し、理性的に反省したところに、ロンドンから Mr. Knightley が帰って来た。Frank に嫉妬して Emma から離れたが、堪えきれずに戻って来たのである。互いに理性的にも感情的にも、結婚する用意が整ったところで、Mr. Knightley は Emma に求婚し、喜びを以て受け容れられた。感情的な行動と理性的な行動を往き来して、Emma が結婚を決意した相手の Mr. Knightley は情熱的な恋の対象ではなく、精神的な伴侶である。軽快だが無責任な Frank と情熱に身を任せ結婚した Jane とは大きな違いがあろう。

物語冒頭で、Emma は精神的な友である Mrs. Weston と離れ、知的孤独に追い込まれる危機に直面し、紆余曲折を経て、真の精神的伴侶を得ることが出来た。これからは、心身共に優れた力を備えている Mr. Knightley と共に有益な経験を積み、理性的な判断力をより発揮出来る生活が待っているであろうことを予感させる結末となっている。



注

- (1) Jane Austen: *Jane Austen's Letters to her Sister Cassandra and Others*, ed. R. W. Chapman: London: Oxford University Press, 1964, p. 297 A letter to Cassandra Austen. 29 Jan. 1813
- (2) *ibid.*, p. 299 A letter to Cassandra Austen. 4 Feb. 1813
- (3) James Edward Austen-Leigh: *Memoirs of Jane Austen*; Oxford: Oxford University Press, 1967, p.157 にこの様なオースティンの手紙への言及がある。  
R. W. Chapman: *Jane Austen: Facts and Problems*; Oxford: Oxford University Press, 1949, p.88 には、この言葉を挙げて、現存の手紙には見当たらないが、上掲の *Memoirs* には言及があると記されている。
- (4) Jane Austen: *The Novel of Jane Austen*, vol. IV, *Emma*, ed. R. W. Chapman, 1933; rpt. Oxford: Oxford University Press, 1966  
*Emma* からの引用は、以後、チャップマンの区分に従って、本文中に記す。(I, i)は第1巻第1章を表す。
- (5) 蛭川久康 (著訳) : ジェイン・オースティン ; 英潮社, 1977, p.43  
Laurence Lerner は I, xvi の反省の個所を次のように述べている。  
It is only by reading very carefully – perhaps only on a second reading – that we realize that this awakening is only partial ...the self-reproach is not intense. The chapter begins, in fact, ‘The hair was curled, and the maid sent away, and Emma sat down to think and be miserable.’ Here is Jane Austen’s irony at its most delicate: first what really matters, then a little gentle misery. How different this is from the intensity of grief that overtakes Emma after the picnic on Box Hill.  
ここにも *Emma* の注意深い読みの重要性が指摘されている。
- (6) オースティンの基本的な考えの1つに理性の優越がある。本作品と同様に他の作品に於いても理性の重要性が強調されている。最初に出版された作品 *Sense and Sensibility* はその典型で、“sense”が “sensibility”に優れていることを主題にしているし、次に出版された *Pride and Prejudice* でも理性を以て“prejudice”を矯正し Elizabeth と Darcy が幸せな結婚に到る。